

それぞれのクロノトポスを類型化して、その特徴を探り、ついで各小説のシュジェート構成の基本因子を抽出しながら、それぞれの主人公像と彼の世界にたいする関係を明らかにしてゆくことであった。この研究の基底にあった考えは、近代以前の各小説群が作りあげてきた諸々のコンヴェンションは、過去の遺物として凝固することなく、その後も長く生命を保ち、近代小説の内容、形式を規定する力を持っている、つまり、それらは「ジャンルの記憶」として、後世の小説の構造や、小説家の意識を有形・無形に左右するのみならず、小説の生を新たに更新してゆく契機を持っているということであったと思われる。

4) また、その出自からしてジャンル横断的・混成的で、整序された確固たる規範を持たぬ小説が、新たに発展し、新しい時代のイデオロギーを自己のうちに反映していくためには、小説は異なったジャンルと

の相互作用が欠かせず、自己の内部にたえず異物＝他者を取りこみ、構成要素としていかなければならない。そのため、バフチンは小説がその境界で接触し、小説を活性化するような隣接諸ジャンルやフォークロア、民衆文化の研究に、30年代の半ばより本格的に取り組む。そして彼は、フォークロア的世界感覚と緊密なつながりのある「広場の芸術」——悪魔狂言、フェルス、ファブリオー等——と、その主人公であるピカロ、道化、愚者の像の文化史的意義を高く評価する。

以上のように、1930年代のバフチンは、小説の言葉の問題を根底にすえながら、民衆文化や小さな芸術ジャンルとの関わりのなかで、小説の発生、革新、発展を一貫して追求してきた。こうした成果があつてはじめて、『ドストエフスキー論』の増補改訂版(1963)や『ラブレール論』(1965)は成立したと言えよう。

古儀式派と諸宗教セクトとの関係

安 村 仁 志

ラスコーリニキは通常《分離派》と呼ばれている。しかし、《分離派》という用語は漠然と、或いはあいまいに使われる。古儀式派に限定して使われる場合と、その他の宗教セクトをも含めて正教会から分離しているもの全体を指して使われる場合がある。そして後者の使い方においては古儀式派と他のセクトの相異点が明確にされていない傾向がある。

一般的に“分離派”と“セクト”は信仰・教義等について教会から分離して独自のグ

ループ、群、派を形成する点で類似点があるが、教理的に異端的になる場合、基本的教理においては同一であっても細部で主張を異にする場合などがあり内容的には多様である。つまり、分派であり異端ということも、教会内分派ということもある。その意味においてロシアの古儀式派はどのような性格をもったものであろうか、また他の宗教セクトはどのようなものであろうか。

《ニーコンの改革》を巡ってロシア教会にシスマが生じ、古儀式派という分離派が

生み出されたが、このシスマ以前にも以後にもさまざまな宗教セクトがあった。主なもののだけ概観するとシスマ以後に生まれた хлысты, субботники, духоборы, скопцы は何らかの点で非聖書的な点があり、一般的に言う異端的要素をもっている。молокане は全般的にプロテスタントの影響を色濃くもっており、ピューリタンのである。その意味では上記セクトとは異質であるが、反正教的であるが故に異端視されたものであった。

古儀式派と хлысты の関係については注意しておかねばならない。ともにニーコンの改革の直後に生まれ、ともに反公教会的であった。それ故に古儀式派の一般信徒のレベルでは区別がつかず、混乱があった。古儀式派指導者アヴァクーム、フェオードルは хлысты の異端性を認め、警告の書簡を書き送っている。その際アヴァクームら指導者は自分たちについて真に正教的であるとして、反 хлысты, 反公教会という態度をとったものとする事ができよう。客観的にみても古儀式派の基本的立場と хлысты の主張(教説)は根本的に異なるものである。ちなみに хлысты は後のセクトに何らかの点で影響を与えている点でシスマ以後のセクトの文字通り源流的なものであった。

シスマ以前にも стригольники, жи-довствующие などのセクトがあった。前者は中世ヨーロッパの異端の特徴であるカタリ派(ここでは一般的に“純潔な者たち”の意でいう)的であるが、二元論的主張をする点でボゴミール派の影響も受けており異端的要素をもっていた。後者は文字通りユダヤ教的特徴(旧約重視、三位一体否定、キリストの神性・受肉・復活など否定)で、ヨーロッパの二元論、異端と類似性をもっていた。その意味で両者とも非聖書的・非

正教會的であり、古儀式派とは直接のつながりはないとみなすことができる。但し、一部の古儀式派セクト(フェオドーシイ派)にはドケチズム(キリスト仮現論)がみられる。これはいわゆる二元論に立つもので異端的な教説であるが、中世ロシアのアポクリファには二元論的要素が多々みられること、ボゴミール→ストリゴリニキ經由で北部ロシアには二元論の影響が残っていたことを背景としているのかもしれない。

では古儀式派とは何か? 確かに正教会が定める sacrament を否定する側面があったが、極端な場合を除いては、司祭がいらない、迫害等で追いつめられているという状況の中で便宜的に生まれてきたものであって、基本的には正教の教理を否定したものではない。あくまでも正教的であると自認しつつも、信仰(生活)を表わす具体的な動作(儀式)、文書についてロシアで定着した伝統に依拠しようとして、新しい制度(ニーコンの改革)に反対したものであった。しかし、19世紀以降になると内部分化の果てに正教からかなり逸脱したものもあった。その点ではいわゆるセクトの特徴に近いものもあったようである。

結論的に言えば、古儀式派と他の宗教セクトは公教会から分離しているという点ではともに分離派であるとする事もできるが、基本的立場においては全く異なっており、前者は正教会内分派、後者は異端的(非正教會的)分派とすることができる。

あえて図で表わすならば、次のようになるのではないか。

